

着靴条件と児童の歩容に関する研究

○春日 綾* 大村知子** (*静岡大・院、**静岡大)

【目的】 児童の生活活動に適した靴選びや靴の履き方に関する基礎的資料を得ることを目的として、児童が使用している通学靴に関する実態を把握した。それに基づき歩容実験を行って、靴のサイズや留め具の種類、靴の履き方と歩容との関係について考察を試みた。

【方法】 調査：1998年5～8月にかけて静岡県内に住む児童とその保護者94組計188名を対象に、通学靴の調達のみかたや靴の着脱の様相などの実態について質問紙調査を実施した。

実験：被験者は健康な6年生の女兒1名で、実験は平坦地の走行と歩行、坂道（斜度7°）、階段の昇降について行った。着靴条件は靴の大きさがジャストサイズ、1サイズ大の2段階、留め具は紐、マジックテープの2種類、留め方は甲部をフィット、ルーズフィットの2方法を組み合わせて、5パターンを設定した。被験者に頭頂点・肩先点・膝点・踵点・足先点など7点に印を付け、右側面・正面・背面からビデオカメラ3台で同時に撮影し、解析した。

【結果】 1. 子ども靴の調達実態：子ども自身も保護者もデザインや色などを重視していた。試し履きを十分にするという回答例は少なかった。

2. 歩容に関する実験結果：着靴条件別にみた一歩行周期中の足首角度の差異は、遊離脚期にみられる場合が多かった。坂道では上りよりも下りの歩行においてその傾向が顕著であり、1サイズ大きい靴や足の甲部分をルーズフィットにして履いた場合はその角度が小さいなどの傾向を示した。甲部の留め具の種類別では全身の上下動に違いがみられた。